

き御教へにあらざるか、我が唱ふる題目は是れ宇宙の眞理たる妙法五字に非ずや。我が心は森羅三千の諸法の根本に非ずや。此題目と我が心と合致したる時、吾人は忽ちにして釋尊の因行果徳の二法を獲得して、我身即是の妙法を現じ、我が心の汚染は晴れて明かなる事實鏡の如く、日月の如く智慧の光明三千界を照す時、即ち我が心の眞の尊さを知るならん。其の時の心や、吾人の絶對に頼みとするに足るものぢん耳。

如何にせば意義ある 生活をなし得る歟

望 月 本 啓

此の問題は常に余が腦裏を往復した事である。恐らくは余のみではなからう。世の中の總ての人が此問題を或は解決し或は未解決の儘持つて居る事であらうと思ふ。今少しく余の信する處に隨て之を言ふて見やうならば、吾々の此の日常生活の

有様を考へて見るに、吾々は人天の大導師として、否教導職の一員として僧侶として一ヶ寺の住職として、誰から何時何處で見られても耻しくない丈の人格があるであらうか。即ち一坊の主人として其れ丈の價値のある様を生活の仕ぶりであらうか。なるほど人様の前では、随分四角張つて其れ程に見悪い事もせないが、扱て自分の室へ歸つて後は如何である。遠慮なく膝を崩す、何時でもかまはず横にゐる。腹も立てる悪口も言ふ、時に依ては人の頭も撲り兼ねない、旨いものを喰はすれば喜ぶ、少し味が變て居れば小事を言ふ、苦勞を仕事をさせられるとブツブツ言ふ、勿体ない事であるけれ共、御妙判を拜讀するより小説を讀む方に力を入れる、机の前へ坐て教科書を讀む時間より火鉢の傍らに空談雜語に過す時間の方が長いと言ふ有様。此れが一坊の主人として、坊内の者に尊敬を受ける丈の價値があると言はれやうか。自分等は他人に向つて信仰を説く身ではないか。乍然吾々の説く其の『信せよ!』は、先に立つべき

將校が遙か後方に引き退て居て兵卒に前進の命令を下す様な者ではなからうか、之ではとても『豫言者古郷へ入れられず』位では濟みさうでない、恐らくは自分の寺にも容れられなくあるであらう、古の人が『身を修め家を齊へ國を治め天下を平にす。』と言はれてあるが天下を治めんとせらば先づ國民各個人の身を修めなければならぬ、而も吾々には其れが非常に困難の事である。此れでは圓頂染衣の眞の意味が不分明になつて來る。元來吾々は何の爲めに出家したものであらう？何の爲めに生れ來たものであらう？と考へて先づ我身の日常生活より改造して行かなければならぬ、誠に此の事は天下國家の問題と比べたなら甚だ小さい事ではあるが如何したから寺内の者弟子等にも尊敬せらるゝ様になるであらうかと思ふに、其れには自分も尊敬される様になると同時に他の者をも尊敬する事が大事ではなからうか、其れにば先づ自己の日常生活を改めて行かなければならぬ、元來今吾々は惑障の爲めに凡夫に生れては居るけれ共

凡夫に始まり凡夫に終るべきの身ではないのである。宗祖の御弟子であるのだ。當体蓮華であるのだ。だから『之れではならぬ』と日一日と佛の道に近づいて行く様に努めると同時に、自分も亦誰も彼も皆貴い所の佛性を具へて居る。今は主従子弟の別はあるけれ共、妙覺の山に走り登つた曉には等しく三身具足の如來であると認めなければならぬ、此れは無理にさう思へと言ふのではない、事實であるのだ。壽量品の御義口傳には吾々凡夫を指して『壽量の佛である』と宣はせられてある。此の理をよく辨へ子弟にも教へて相互に貴び合ふ様にせねばならぬ、言ひ換へたならば自分は一山の主人であるから寺内の者は、皆自分の爲めに働くべきものであると云ふ様を考へを起さないで、内中の者を皆佛にしてやる爲めに、自分の手許に集めた者であるのだから其れ等の佛にある爲めには自分の身をも投げ出すと言ふ風に考へたならば、自身も尊敬せらるゝ様になるであらう、此の事は今新しく始まつた事ではない、一僧一山に住職す

るは、其の檀方一統皆佛にする爲めである。否其れ處では亦抑も自分の出家得道したる其の眞の意味が抑も其れであつたのだ。

此の事は獨り吾々僧侶ばかりでは亦、苟も日蓮上人の弟子檀那と名乗る程の者は、必ず此の心掛けがなくてはならぬのである。『己れは一家の主人であるから下女や下男と同等の者と認められては、主人としての威嚴を保つ事ができない。』なぐと思はないで、時に依ては下男の手傳をして庭の一も掃く様にせねばならぬ、其處に主人の威嚴が具はるのである。此の心掛が即ち心に妙法を存する者である。『佛とは何をいわたのこけむしろ只慈悲心にしくものは亦し』とはこの心を言たれものである。提婆品の中に『採薪及果菰乃至情存妙法故』と説かれてある。御身は大王の家に生れ給ひ乍ら、山に入られ給ひしものは、太子自身も佛となり、父母妻子乃至一切衆を佛にしてやらうと思食された爲めであつたのだ。主人たるものにこの心掛があつて、各其の職業に依て、譬へば、一足

の草鞋を作るにも、これを以て、自分も佛になり所従をも佛にするのであると觀じたならば、流るゝ汗も手に揉み出した豆も皆喜びの種となるのである。所従も亦この心掛にて下女が勝手に鍋を洗ふにも、妻が井戸端に洗濯をするにも、之れを以て主人も自身も佛にあり、一家を圓滿にするのであると思ひて、夕に喜んで歸る主人を喜んで迎へる、一家喜んで先祖の前へ南無する、これが即ち宗祖上人の『唯だ女房と酒打ち飲みて南無妙法蓮華經』と宣はせられたる謂であるのだ。斯してこそ、始めて眞の生活の味ひを知る事が能るのである。名譽も富も斯くして得たる者こそ眞の名譽であり富であるのだ。斯くの如き家庭が集て一村乃至一郡一國をなし、終に日本國中是の如くなりたる時が、即ち宗祖上人の所謂『吹く風枝をさらさず雨壤を碎かず、代は義農の世とありて今生には不祥の災難を拂ひ、長生の術を得、人法共に不老不死の理顯れむ』と宣はせられたる時であるのだ。これが沙婆即寂光煩惱即菩提生死即涅槃を顯現し

たものである。

宗祖の御銅像を拜して

小林 貞 宣

袈娑凜留色 瀝盡滿腔丹

天地納三諫 風雷排萬難

宣闡無上道 成就甚深歡

妙法蓮華相雲開十丈寒

日蓮上人銅像贊 石塚居士 永坂周拜艸

此處は九州博多東公園、廣い松原は、縁滴るばかり枝の沙風に吹かれて、或は眞直に、或は曲れる等あり、中に嚴然として立てるは宗祖の御銅像である。正面に『立正安國』と太く大きく掘りつけてある。

笑へば子女も懐かしみ、怒れば龍虎も恐る御説光、御袈娑は凜として空に翻へり、雲を開いて丈高く、御生涯御奮闘の有様は、今猶雨と闘ひ風と争ひ、自分をして地に伏し歡喜と尊敬との涙を

以て拜せしめた。宛然生身の宗祖に遇ひ奉る心地して、唱題は腹の底より湧き出でた。あの深草の元政上人が延山に詣で『俱に末法に生れて師に逢はず。』と詠じ給へる詩も、自分には俱に末法に生れて師に逢ふのうれしさ、之に比ぶるものはあかつた。春の曉に、朝霧繞ぐる松原を裸足にて參拜する人老若男女、何れも一同に銅像前のうがひ水にて手を淨め口を濯ぎ長い線香を林の如く立て、煙は霧と一つにあり、松原の中は眞白にゐる位である。かくして御銅像前の石段に座して、一同の腹より絞り出して唱ふる御題目は、松原に響いて寂光土を眼前に現じた。殊に若き婦女子の細い、しかも透る聲で、一心に唱ふる題目は、他に稀に見るところで、全く感服の外はなかつた。御銅像の石段を上つて御姿の周圍を繞つて見るに、御臺座には御一代記の圖と蒙古襲來の悲惨な圖とが刻してあつた。御一代記の龍之口法難、及び小町の辻説法の宗祖の御顔は、信徒が手を以て摩擦すると見えて光つて居た。この一事を見ても如何に九